

ヒグマ草食化していた

北海道のヒグマは明治時代以降に急速に草食化したことが、北海道大や京都大の研究でわかった。保存されていた各年代の骨を分析した。道内の開発が影響した可能性が高いという。英科学誌で発表した。

ヒグマは北半球に広く生息し、植物や虫、魚など、生息地で得られる動植物を食べる。北米のヒグマはシカやサケの仲間を多く食べるが、北海道のヒグマはフキやサルナシなどの植物が中心。道内にもシカやサケはいるが、いつから草食中心になったのかは不明だった。

**北大・京大グループ
骨を分析**

研究グループは、道東と道南のヒグマの骨を博物館などから提供してもらい、よく食べる動植物によって骨に含まれる比率が変わる炭素や窒素などを分析。骨の年代を「本格的な開発前」、「開発初期」（1931～42年）、「現代」（1996年以降）の3期に分けて、ヒグマが食べた物を調べた。

その結果、道東のヒグマは本格的な開発前（1920年以前）はシカや昆虫

などの陸上動物が64%、サケが19%を占めたが、現代はどちらも8%に減少。道南も開発前（1890年以前）は陸上動物が56%だったが、現代は5%に低下していた。

サケの減少は、人間による乱獲や河川の開発が原因とみられる。シカは現在も多く生息するが、研究グループの松林順・総合地球環境学研究所研究員は「ヒグマはシカの成獣を狩れず、オオカミがしとめたシカを横取りする。北海道では19世紀末にオオカミが絶滅したことが影響しているのではないか」と話している。

（阿部彰芳）

明治以降急速に開発影響か

北海道